

俳句日記

2021-2022

池窪弘務

散歩の途中です。  
いつまで歩けるか？  
歩けるところまで。



一月（令和三年）

一月句会（4句）

イヌキツネ障子に踊る歌絵かな  
指紋なき親指淋し年の暮

しまい湯を落としてやと煮しめかな

除夜の鐘父と母との子供なり

坊主めぐり孫の誰かがきくと泣く

二月

二月句会（4句）

枯野から始まる土の香りかな

大寒や心の箱を覗きけり

冬休み名探偵の名刺あり

春一番コロナを飛ばす風になれ

花落と寒さに耐へる童かな

大寒や小さな夢をまた見たり

大寒や子供の声に背を押され（見守り隊）

生きるとは苦しきことなり寒椿

生きるとは楽しきことなり寒椿

生きるとは悲しきことなり寒椿

冬籠り溶けて見守り隊になる

枯野行くくうら姿の昭和かな

今だけの小さな子供に春の風

春立つや見守隊が見守られ

春立つや億の細胞立ち上がる

春暁や思はずカメラ向けにけり

ワクチンの接種始まる霞かな

春愁ひ空気にとける雪ひらり

ぬばたまのコロナの闇や牙返る

折りとらてコップに差した梅の花

春の川ももうすぐ鯉が泳ぎだす

洋裁は習ひ事なり妣（はは）の春

雲丹眠る利尻の海は遠く遠く

三月

三月句会（4句）

草萌や見守隊と子ども達

ゆめうつら朝寝楽しむ半時間

卒業や二度と会はない友ばかり

雪ひらり空気にとける雨水かな

朧夜や夫婦一緒に歳をとり

電波時計アンテナ密に山笑ふ

桜咲くあつとという間の浮世かな  
春うれひ誰が呼んだか救急車  
快便があれば良き日と思ひけり

四月

四月句会（4句）

そろそろと思ふ間もなく燕来る  
春うれひアクリルごしの義母（はは）の声  
春菊のかをりいたたく夕餉かな  
春分やふたかみやまに夕陽落つ  
見守りや新入生に遅れ（と）  
獺犬もあくびこらへて目借り時  
うしろかやスマホで俳句五七五  
見守りや新入生に遅れ（と）  
生まれるは死ぬことなりと目刺食ふ  
孫の手の指五本あり夏近し

五月

五月句会（4句）

ウオーキングが少し遠くへ夏の秋  
初夏の旅スマホで俳句五七五  
兄と折る古新聞の鯉のぼり

遠き日の父の笑顔や鮎放つ

翔乎の二刀流なり（と）もの日

追憶に生きる父母（ちちはは）夏の川

母の日は妻の日となりケーキ買ふ

母の日は妻の日となりテイクアウト

六月

六月句会（4句）

カタツムリ背負り家の重さかな

紫蘭咲く子連れ（と）の猫の散歩道

ステテコは父親ゆづり更衣

百歳の義母にワクチン若葉風

かたむむり何も知らぬ君のこと

今年また静かなひかり紫蘭咲く

七月

七月句会（4句）

大暑の日私を生んだ母がある

風呂掃除夫の仕事に七変化

さくらんぼ啄む夫婦五十年

夕立の軒なき所の宿りかな

八月

八月句会（4句）

炎昼やパンデミックの中をり  
夏の夜の夢の（ド）まの螢かな  
竹トンボ飛ばす空なき夏休  
遮断機の向こうに灯る盆供養  
鮎釣や瀬音に消える父の声  
母ならば幽霊でもと盆供養

九月

九月句会（4句）

朝刊と一緒に届く秋の風  
爽やかや昨日と違ふ散歩道  
朝一番海なき所に秋刀魚来る  
松茸が残るすき焼昭和かな

十月

十月句会（4句）

居眠りの合間合間に虫の声  
月の笠明日は雨かと独り言  
行く秋や後期高齢者りの間に  
食卓に夫婦の薬秋の声  
十一月句会（4句）

鳥の声ふと顔上げて時雨かな

コスモスの一輪彩に墓参り

この秋は柿を小さく切つて食む

一日を生きて吉日暮の秋

十二月句会（4句）

かさかさと桜の落葉増してゆく

配達のはがきを受け取る冬ぬく

食洗機に紙の注連縄買ひにけり

東塔の語る千年時雨かな

一月（令和四年）句会（4句）

初景色大和三山独り占め

初詣鎮守の杜に手を合はす

初場所や大鵬の孫入幕す

海水をまどふ海鼠のきたりけり

二月句会（4句）

春隣日の出一分早くなり

思ひ出は雲に溶くる昭和かな

パンデミック終二会の僧の祈りかな

大寒や月の在りかを探しけり

三月句会（4句）

雛まつり娘三人母となり

春の川白鷺の子の滑走す

甲子園目指した孫も卒業す

春うれひ妣とおんなじ薬飲む

四月句会（4句）

五十年夫婦で愛づる桜かな

牙え返る遠くて近き戦火燃ゆ

リモートの入学式や子はどくに

野良猫のゆくり渡る春野かな

五月句会（4句）

風薫る畝傍耳成天香具山

恥ぢらひの光を纏ふ紫蘭かな

ゴールデンウィーク人の遊ぶを見て遊ぶ

こどもの日孫に抜かれた背の丈

六月句会（4句）

リモートの義母との会話走り梅雨

笹舟を心の海に放ちけり

朝焼けや農夫見つめる用水路

さくらんぼ小さき恋の始まりぬ

七月句会（4句）

向日葵や地蔵の笑ひおんかかか

田に映る空の深さや早苗整ふ

一度上げちびちびと飲む麦茶かな

鮎釣や竿しならせる兄の笑み

八月句会（4句）

つつまき朝の一膳残暑かな

「連」といふ劇団ありて京の夏

所在なき分家の盆は人もなく

すいとんの味は知らねど敗戦日

九月句会(4句)

七十も半ばを超えて処暑の空

秋彼岸俳句の多き母の文

野を逃り行く先先に秋桜

山ほどの迷惑メール残暑かな

十月句会(4句)

花野みちこき父母と歩きけり

落ち鮎やふふふと笑ふ父がいる

体育の日少し遠くへウォーキング

誰偲ぶ明日香の里の思草

十一月句会(4句)

戦争の終りの見えぬ神無月

新米の湯気つややかな朝餉かな

辻ごとの地蔵に出会ふ文化の日

生も死も私の中に寒椿

十二月句会(4句)

おやどギャグ笑ふ人な(年の暮

冬の星あれは父なりあれは母

ゆずかぼちや金婚式の冬至かな

寒菊の小さく揺れて憂国忌

一月句会(4句)

去年今年昭和 大正 遠くなり

元旦の障子開ければ松光る

パソコンに小さなが(め縄年用意

針供養見えな(糸を通しけり

二月句会(4句)

探梅や(の所今はふじよとに

節電のリモコン構へ冬堇

バレンタイン娘のチョコのお守り分け

我もまた小さき命寒雀

三月句会(4句)

早春の河原に遊ぶ石叩き

浮き浮きと仲良き母娘春の旅

雛まつり三人官女は玉子なり

眠りや(薬に頼る春憂

四月句会(4句)

三輪山の一步近づき山笑ふ

満開の桜の下の地蔵かな

遠き日の入社の友や今どこに

清明やキトラの里に蛇眠る

五月句会（4句）

名人戦ペットボトルの新茶かな  
メーデーや声なき声に満ち溢れ  
なみぎりになみぎりに（昭和の日  
針仕事すつと糸ひく春の果

六月句会（4句）

更衣香久山探す散步道（持統天皇万葉集）

五月雨や人も地球も水となる

短夜の短き夢や父に会ふ

祖母と（長い縁側夏休

七月句会（4句）

七夕や遙か昔の星を見る

日本語のひらがながすきくくらんぼ

海水浴海月と浮かぶ太平洋

プラントターの土光りけり胡瓜なる